

ゴブスレ世界にドラクエ能力者来訪

てる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『ドラクエ転生』をミスして『ゴブスレ世界』に転生させた巨乳女神限定で口が悪い女のお話

※この作品は主人公幼少期↓ゴブリンスレイヤー外伝：イヤーン  
↓原作となります。

12／12 日刊ランキング54位ありがとうございます！

## 目次

主人公10歳	
女神とドラクエ 女とゴブリン	1
日常と女神	10
荷馬車と少女 槍の少年	14
番外編：10年後の少女「ゴブリンを美味しく食べたい」	20
冒険者と悪人 少女と仲間	23
少女ともふもふと少年 そして別れ	34
主人公15歳【イヤーン編】	
春と成長 別れと始まり	37
番外編：5年後の少女「そういう仕様」	45
番外編：5年後の少女「そういう仕様2」	49
街とテント ようやく再会	52

主人公10歳

女神とドラクエ 女とゴブリン

この世界には月が二つある。

緑色の大きな月と、その隣にある桃色の小さな月だ。

私には前世の記憶というモノがある。

月が一つしかない世界で生きていた自分はある日、

無駄に乳のデカい女の前に立っていた。

シクシク泣きながらも話しだす女によると

この女は女神で、人々を悪しき者達から守護する立場でありながらも

仕事でドジして一般人である私を彼女が殺してしまった為に上司にうんと叱られ

詫びにパラレルワールドの一つにサービスで記憶を持ったまま転生させる事になったらしい。

パラレルワールドは神様からしたら好きに遊べる遊園地

転生者の存在でおかしくなっても気にしないで遊べる世界、らしい。

ちなみに女が泣いてたのは『仕事でミスして怒られた私可哀相』が理由であり

私を殺してしまった事に対しての申し訳なきとかでは、ない。

この後私が死んだ事へのショックと反省していない女神に対しての怒りで

女神の乳をちぎる勢いで鷲掴みして引っ張ったりしたのは

私の胸が平坦だからでは決してない。

決してない。

胸を抑えながら女神がこれから転生出来る世界の名前と紹介文を

視界に入らない程に溢れかさせる。

その名前の中にはゲームや漫画の世界も存在しているらしく、とても有名な作品から名前だけなら知ってる作品まで幅広く存在している。

その中から『私が知らない作品』と『転生者がいない世界』だけにすると八割は消えた。

五割が知らない作品らしいが……一体この女神は何人人間を殺しているのだろうか。

あれから沢山悩んだが、どの世界にするか決まらないので

結局自分も知ってる有名な作品の中からランダムで選ぶ事にした。

ちなみに選ばれたのは『ドラゴンクエスト』。

実況動画を視聴したりもしていたけど、実際に私がプレイしたのは6〜9までだし

『レベルが足りなかったり』『データが消えたり』『終わらせたくない』やらで

最後までクリアした事が一度もないんだけど、大丈夫だろうか。

え？、自分が主人公キャラではないから一般人として生きてもいいし

ゲームのレール線が存在しないんだから剣士や僧侶とか好きな職業に就いて好きに生きてもいい？

……それはそれで不安だ。

これで終わりかと思っていたが

次は転生後の見た目の変更をする事になった。

ゲームでよく見るキャラ作成画面が出て来たのを見ると

神様にとってパラレルワールドはゲームの様な軽い扱いの様だが、

自分もその世界の人間になったら『飽きた』とか言われて一瞬で消されたりしないのだろうか。

ちよつと心配である。

前世と余り変わらないショートヘアの黒髪コゲ茶目の女の子が  
出来た。

隣で見えていた女神に『味気ない』と言われたが、  
今までプレイしてきたゲームでもこれで遊んできたんだ  
それ位『無難』が好きなんだ、ほっといて欲しい。  
また引つ張るぞ。

女神による転生の準備が始まる

謎の光る魔方陣と謎の詠唱魔法を唱える女神は本当の女神に見え  
なくはない。

ちなみにチートとかは女神がもつとやらかさないと貰えない特典  
らしく

現在貰えた転生者は片手で数える位らしい。

……一体なにをやったのか気になるが、それは前任者達がやった事  
らしく

この女神は知らないらしい。

それにしても、

意識が薄れていく中で聞こえた女神の

『あっ』

がとても気になる。



この世界には月が二つある。

緑色の大きな月と、その隣にある桃色の小さな月だ。

ドラクエの月ってこんなだったっけ？。

この世界に転生した私はスライム一匹見ないまま十歳になった。

確かにモンスターは存在する様だが、スライムやドラキーマの被害は  
なく

やれゴブリンが、大鼠がと確かにドラクエにも存在しているモンス  
ターだが

何故スライムの名前が出て来ないのだろうか。

もしかしたらこの世界はドラクエ世界ではないのだろうか？。

あの女神『あつ』って言ってたし何かやらかしたのだろうか。

次にあつたら引き千切ろう。

だったらこの世界は一体どこの世界なんだ？

調べようにも小さな田舎では情報が集まらないし、

レベル上げしようにも村の中にいたらモンスターと遭遇する事も

無いし

森の中に行こうとすると一人だと危ないから勝手に行くなど言わ  
れるし

このままだと自分は平和に農民として生きていく事になりそうだ。

そう思っていた時期もありました。

そんな平和な農民ルートを外れるきっかけは母との仕事の話から  
始まった。

この世界にも『やくそう』が存在しているらしく

自分は母親と一緒に森の入口でやくそう取りのお手伝いをする事  
になった。

やくそうの生えている場所の近くには村の門番もいるから

やくそう採集をする際は何かあったら門番がすぐに駆けつける事  
が出来る距離まで

と教えて貰いながら、母と一緒に森の中に入った。

母親の近くで薬草の見た目と取る際のルールを聞きながら  
それなりに楽しく採集をしていたが  
ここで事件が起こった。

日が暮れる前に帰ろうと母と一緒に森を抜ける所で  
この日まだ見た事のない植物を見つけた私は  
なんの植物か気になりほんの少し母から離れ、母に何の植物か尋ね  
ようとしたその時

『ゴツ』

という鈍い音が響いた。

母親は地面に伏し、後頭部から赤い血が滲み出ていた。  
一瞬何が起きたのか分からなかった。  
だが、それが誰が原因で起きたのかはすぐに分かった  
倒れた母のすぐ近くにいる自分と同じ位の体長の緑色の醜悪な生  
き物……ゴブリンの姿があった。

確かにゴ布林だ。

だが、ドラクエ世界のゴ布林とは似ても似つかない。

下賤な笑い声を上げながらこちらに近づいてくるゴブリンの目線  
に嫌悪感が沸き上がる。

これは殺しがメインではない

こいつは今から私を辱めるつもりなのだろう。

手に持つこん棒で死なない程度に痛めつけ

巣穴に連れ込むつもりなのだろう。

大人を運ぶとなるとゴ布林一匹では大変だろうが

大人になり始めたばかりの子供ならそこまで苦もなく運ぶ事が出  
来る。

震える体で考えてしまうのは自分の未来。

女神に殺され



違う世界に転生させられ  
ついにはゴブリンに犯され  
繁殖の苗床にされ  
殺される

なんて転生人生、戻れるなら転生キャンセルしたいくらいだ。

どうしようこうしようと考えていたら声が聞こえた。

母の声だ、

母はまだ生きていた。

小さな声で「逃げて……逃げて」とそれだけを呟いている。

そんな母をゴブリンが口角を上げ蹴りを入れるその行為に  
恐怖は怒りに変わった。

ここで私だけ逃げたら母はどうなる？

少し離れた場所にいる門番に聞こえる様に大声を出して助けを  
読んでもいいが

その場合ゴブリンは臆して逃げてくれるだろうか？

……少しだけ時間が欲しい。

出来れば

『ゴブリンが一ターンだけ動けなくなる時間が』

欲しい。

じり、とゴブリンが近づいて来た

私を見つめてヨダレを垂らすゴブリンを前に今の私は怒りで体が  
震えていた。

ゴブリンがこん棒を振ろうとしたその時、私は動いた  
私が手にしたのはただの砂

それを思いっきりゴブリンの顔にかけてやった。

醜悪な鳴き声を上げながら涙目になり目をつぶるゴブリン  
目に入った砂を手で取ろうとしている姿を見て震えは止まり  
体は次の行動を取っていた。

目の中に入った砂を取る事に集中していたゴブリンのこん棒を私は取り上げた。

突然の事に声を荒げ取り返そうとするゴブリンの攻撃は  
私には当たらない。

目の見える私はしっかりこん棒を握って標的をしっかりと狙う。  
そして

ドゴツ

とてもいい音がした。

それを切り口に

私は何度も何度もゴブリンを殴っていた。  
相手のターンが来ない様に私が何度も殴っていると

《 パララツ パツパツパー 》

突然のファンファーレの音にこん棒で殴る手を止めて辺りを見回  
してしまった。

しかしトランペットを持った人間の姿はない。

これは……レベルアップの、音？

ゴブリンを倒した事でレベルが上がったのだろうか

《 あなた は ホイミ を おぼえた ！ 》

やはりドラクエの世界なのだろうか

頭の中で響く謎の声にドラクエ世界の人々にとってこれが当たり前なのだろうか

少し不安になって来た。

そして私の覚えた呪文はホイミ

主人公が一番最初に覚える魔法である回復魔法

回復魔法……

体はすぐに動いた

血を流して倒れていた母親の前に来た私は覚えてたの呪文《ホイミ》を使った。

するとみるみるうちに母の頭の傷口は塞がり顔色も少し良くなった様に見える。

もし死んでいた場合ホイミを使っても意味はなかった

生きていてくれて良かった

ホイミを覚えて良かった

そして、助かって良かった……。

やはりこの世界はドラクエ世界の様だ。

ただ、少し自分の知っている世界よりも

かなりリアルな見た目になってるだけの様だ。

なら頑張ってレベルを上げよう。

どこまで強くなれるか分からないが、

ゴブリン相手でも死なない程度には強くなりたい。

しかし冒険者の話を聞いて

この世界が『ドラゴンクエスト』の世界ではなく

『ゴブリンスレイヤー』の世界だと理解した頃

何処ともいえぬ場所にいる存在が意味もなく胸を抑えていたらしい。

## 日常と女神

今日も今日とて私は働く  
目指すは冒険者、安定した生活。

ゴブリンに襲われたあの日、  
私がホイミで母さんのケガを治した所で  
騒ぎを聞きつけた門番に救助された。

まさか森の中でクマさんじゃなくてゴブリンに出会うとは思わなかった。

……うん、クマだと死んでたわ  
ゴブリンで助かったと思うべきか。

母さんは医者に治療してもらって今ではいつも通りの生活に、  
今頃の紹介だが父さんはあれから母さんを心配して一緒にいる時間が増えた事により  
弟か妹ができるかもしれない。  
そして無傷どころかゴブリンの返り血を浴びるだけですんだ私は  
今日も冒険者になるための日々を送っている。

オノを持つて私はまきを作る  
私を殺した女神を想像して私は木を割る。

なんて、冗談半分に私は今  
村の住人のまき割りを代行している。

私は去年から冒険者になるための資金を稼ぐために  
あちこち家を回って仕事を手伝い、お礼にお小遣いをもらう生活をおくっている。

ちなみに仕事の内容は

『炊事』『洗濯』『掃除』『野菜収穫』

『まき割り』『水くみ』『マツサージ』『子守り』

とまあ日によってまちまちだけど、

子供なのにしつかり仕事をしてくれるとウワサが流れて仕事がなくなる事はない。

まあ、村に住む人たちは物々交換が主流でお金は余り使わないから持っていない家からは野菜とかもらってしまいが、

それは我が家の食事が豪華になるから悪くはない。

最近是我が硬貨ならお仕事をもっと頑張ると言ってたおかげか

村人たちもお金を所持する様になって軍資金も少しだけたまってきた。

我が家の両親は母が薬師、父が猟師で

二人の仕事も合間合間に手伝ったり教わったりもしている。

冒険者になった時にきつと役に立つはずだ。

両親は冒険者という死に行く様な職業に就かずに

親の仕事を継いで欲しがっているが、

今回のゴブリンを退治した件もあり

私が冒険者なりたがっている事を理解してくれたのか諦めたのか

今は反対せず様子見している。

できればまたモンスターを倒してレベルアップとしゃれこみたいけど、

森で襲われてからは森の中に入るのはもっと大人になってからと言われて

あれから森に入れないでいる。

まあゴブリン一匹で恐怖を覚える存在だ  
ゲームみたいに死んでも復活する訳でもないから  
レベル上げとか気楽に言えないのは不便だ。

今日も今日とて私は働く

目指すは冒険者、安定した生活。

……危険な仕事が多い冒険者になって安定した生活とか  
矛盾している気がするけど私は気にしない。

夢を見た

あの巨乳女神が実体を持たない映像だけの姿で私の前に姿を見せ  
た。

なんでも私がレベルを上げた事を知った女神が  
職業について説明をしたかったらしい。

なぜ映像だと分かったのは  
触る事ができなかつたからだ……チツ。

現時点で私の職業は旅芸人らしく、

女神の話によると勇者以外の職業に就く事ができる事を教えてく  
れた。

『戦士』『僧侶』『魔法使い』『武闘家』『盗賊』『旅芸人』

『バトルマスター』『パラディン』『魔法戦士』『レンジャー』

『賢者』『スーパースター』『まもの使い』『どうぐ使い』

『踊り子』『占い師』『天地雷鳴士』『遊び人』

……これ、ドラクエXじゃないか？

私やった事ないし、あの世界はレベルが100以上なるし

知らない職業もあるんだけど。

どの職業が自分に合っているのか分からないと言ったら  
幾つかラインアップしてくれたから今回映像だけでの登場には目  
をつぶる。

村人なのに職業が旅芸人なのはおかしな話だが、

まあ好きな職業をテーマ神殿に行かなくても何時でも選択できる  
のは便利な話だ。

それにしても女神が小声でなにかつぶやいていたのが気になる。



## 荷馬車と少女 槍の少年

ガタガタガツタン ガタガタガタガタ……

荷馬車に乗って私はどこへ行く

別にドナドナではない

私は両親と一緒に荷馬車に乗っているんだから。

あの夢を見た日から、

私の中のナニかが少し変わった気がする。

まあ変わった理由は

職業が『旅芸人』から『まもの使い』に変わったからだけど。

職業が変わってから

マキを割る際にちよつとだけ楽になったり

水くみがそこまで苦にならなかつたからだけど

後は特に変わった気はしない。

荷馬車の音と振動に合わせて体が揺れて気分が悪くなる。

なぜ私が荷馬車に乗っているのかというと、

母の作る薬が村周辺でしか取れない薬草を使った効能の高い薬の

ため

それが必要とする近くの村に売り歩いているからだ。

今まで私はお隣さん家で両親が帰って来るのを待っていたが

これからは家族全員だ。

まるでピクニックみたいでテンションが上がるが、上がったのは腰だけだ。

荷馬車の中は揺れがひどくて数分でお尻が痛くなって立ち上がってしまふから困ってしまう。

何かクッションが欲しい…… ないよね、知ってた。

たくさんの薬や数日分の食料の入った樽や箱が積まれた荷馬車は少々狭いが

これはまだ序の口だ。

なぜなら私たち家族の他に冒険者がいるからだ。

村から村への僅かな行き来でも危険は付き物

盗賊やモンスターが舌なめずりして人を襲うの待ってるからだ。

そんな危機から救ってくれるのが冒険者パーティ！

少々依頼料が高かったりするし薬を村々で売ったりしても

どっこいどっこいしか稼げないけど、

両親は困っている人達に少しでも良い薬を渡したいと思っているから

多少無理してでもこうして馬車で移動するお人好しだ

そんな両親が好きだよ私。

荷馬車の外へと顔をだすと

ゆつくりと進む荷馬車と一緒に歩く冒険者たちの姿。

『男戦士』と『男僧侶』、『女魔術師』に『女格闘家』

フランスのいいパーティに見える気がする、男女比もね。

荷馬車から顔を出して冒険者たちをチラチラ見る私に

にこやかに笑いかけてくれた女格闘家さんの笑顔に花丸をあげちやう。

あれから特にモンスターや野党に襲われることもなく

すつかり日も暮れてきた。

パチパチとたき木の燃える音をBGMに私たちは今、野営をしている。

何時もより少し硬いパンや味の濃いスープの夜食も終わった所で

冒険者達が見張りを始めるまでに時間があつたから

『冒険者になるにはどうすればいいのか』

『階級とかがあるのか』

『装備はどうしているのか』

『どんなモンスターがいるのか』

なんて、気になる事を冒険者達にいろいろ質問をした。

両親は申し訳なさそうにしていたが

冒険者達も日々の冒険の話を交えながら話してくれて

寝る時間まで楽しい会話が繰り広げられてとても楽しかった。

……うん、なるほど

冒険者達の話を聞いてどんな世界なのかだいたい分かった。

そしてなぜあの女神が自分の前に直接姿を見せないのかも納得した

あのアマ 私を間違えてゴブリンスレイヤーの世界に放り込みや  
がったなああああつ!!!

やけに胸元を押さえながらおどおどしてると思ったらそういう理  
由か

やっぱり次は千切る！

デビルマンみたいに千切ってやるから覚悟しておけこの「削除さ  
れましたー!!!

怒りに震える夜も明けて太陽もすっかり頭上にある時刻、  
私の住んでいる村と同じ位のんびりとした隣村についた。  
最初の内は薬を売る手伝いをしていただけ、

今は昼休憩をもらって村の散策を楽しんでいる。  
道中で手に入れたエクスカリバー<sup>棒</sup>を片手にぶらぶらしていたら  
遠くから子供の掛け声が聞こえた。  
好奇心に負けて様子を見に行くと、  
どこかで見た事のある様な風貌の少年が  
長い槍を振るう姿があった。

「なにしてるの？」

今日も村外れで槍を振っていると知らない子供の声が聞こえた。

一体誰かと振り返った先にいたのは

少年だと勘違いしそうな肩より短い黒髪の同い年位の少女の姿が  
あった。

産まれた時から住んでるこの村で見かけた事のない顔だ。

このまま無視して槍の修行をしても良かった。

でも、少女……こいつはじろじろと俺の顔を見て来るのが何だかム  
ズ痒いわ鬱陶しいわで

ついこつちから話しかけてしまった。

「……おまえは？ 見かけない顔だけど」

「私？ 私は親と一緒に薬を売りにこの村に来たの」

薬？ ああ

そういえばうちの親が良く効く薬を隣村の薬師が売りに来る時期  
だとか言ってたな

こいつの親がそうだったのか。

「で、何してるの？ 修行？」

また話が振り出しに戻った。

このまま無視しても良かったけど、こいつの好奇心はまだ薄れていない。

向こうからさらに話題を出される前にさっさと終わらせよう。

「……俺、冒険者になるんだ。」

「冒険者？」

「ああ。そして、俺はこの槍を使って英雄になるんだ」

「英雄」

『なれるわけがない』

周りの大人たちから何度も言われたその言葉。

やってみないと分からないのに俺を否定する言葉。

こいつも親の跡を継ぐために仕事について来てるんだ。

地道に親の跡を継ぐための日々を過ごすこいつも

きつと俺を馬鹿にするし同じ言葉を吐くんだ

そう、思っていた。

「私も冒険者志望なんだ」

「……おまえも？ でも、周りから何か言われないのか？」

「うん。でも、一度決めた事だからね。」

冒険者が続けていれば皆も分かってくれる日が来るよ、きつと」

『だから、お互いに頑張ろう』

そう笑う少女に俺は言葉を失った。

そうか、俺だけじゃないんだな。

周りからどう言われても自分の信念だけは曲げない決意を持つ少女の瞳は

遠い未来の俺が、目指すべき瞳をしていた。

「そっか そっか！  
なら、いつか一緒に冒険しようぜ！ きつとすごい冒険になるぞ  
！」

こいつが村を去るまでの間、俺は二人で色んな話をしていた  
そして村を去った後になってから、お互い名前を名乗り忘れていた  
ことに気が付いた。

……でも、いいんだ。

お互い冒険者になればまた会う事になる

その時にでも名乗りあえばいい

そして、あの日話した冒険をしようと誘えばいいさ。

相変わらず周りから『なれるわけがない』『現実を見ろ』とか言われ  
るけど

そんな奴らにもいつか分かって貰える日が来る様に

俺は数年後を夢見て今日も槍を振るう。

番外編：10年後の少女「ゴブリンを美味しく食べた  
い」

「ゴブリンを美味しく食べる方法ってないかな」

今、主人公彼女はなんと言った？

今日も今日とてゴ布林退治に赴いたゴブスレー行冒険者達。

野営中の食事時に彼女……魔物使いが発した一言が

ゴ布林スレイヤー含む5人の時を止めてしまった。

「い、一応聞いておくけど　どーしてそんな突拍子もない事言った訳  
？」

焚き火の向かい側にいる魔物使いに詰め寄って来たのは上の森人  
の妖精弓手。

そんな彼女に魔物使いは後ずさる事もなく言葉を紡いでいく。

「美味しいモノは人々を魅了するでしょ？」

でも美味しいからって沢山取り過ぎたり狩り過ぎていくうちに数  
が減って

最終的に絶滅する事って少くないんだよね」

実際彼女の前世の世界では美味しいから・狩りやすいからという理  
由で

多くの生き物が絶滅しかけたり完全に絶滅してしまった事を知っ  
ている。

なら、この世界で多くの人々にとって厄介者であるゴブリンを美味  
しく料理して食べてしまえば、

ただ駆除するのではなく食材として狩っていけば

長い年月をかける事なく奴らを絶滅させる事が出来るのではない  
かと思ひ続け

ついには言葉となつて今日、発してしまったのであつた。

「なるほど、それで数が多く厄介者である小鬼共をその対象にしたい、  
そう仰りたいのですな」

「確かにあのゴブリンが旨いとくれば冒険者に依頼として狩られる様  
になつて

次第に数も減るつちゅーこつた」

魔物使いの言葉に納得して頷く<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人の僧侶と、

酒のつまみにと話しに混ざる<sup>ドワーフ</sup>鉋人の精霊使いが話題に混ざり始め  
妖精弓手は『うげっ』つと嫌そうな顔をした。

……そして話についていけずにオロオロしている女神官に

ゴブリンの話題でありながらも不気味なまでに黙っているゴブリ  
ンスレイヤーは

静かに彼らの会話を聞き続けた。

「ちよつとー！ 勝手に話を進めないでよね！

それにあいつら如何にもマズそうじゃない！」

「あいつら汚いからまずは水責めしてから血抜きするでしょ？」

腐りやすい臓器は処理するでしょ？

肉の臭いもきつそうだから煮詰める際にハーブとかで対策すると  
して

……灰汁も多そうだし何度も取り除かないといけないかな」

「料理にするなら見た目も意識せんとな

ゴブリンの肉と聞いても見た目が悪くないなら皆興味も持つつて  
もんよ」

「然り」

「あんた達ねえ！」



ガタッ

静寂を貫いていた男、ゴブリンスレイヤーが突如として立ち上がった事により

会話は一瞬にして止まり、全員が彼に目を向ける。

「ご、ゴブリンスレイヤーさん？」

「オルクボルグ？」

「試してみる価値はあるかもしれん……やるか？」

「流石ゴブスレ！料理はマカセロー！」

「ぜーぜーぜーったい！ お断りよっ！！！！」

妖精弓手の一声は、暗い夜にそれはそれはよく響いた

それからゴブリンが食べられたかどうかは、今はまだ誰も知らない……。

## 冒険者と悪人 少女と仲間

《 ▼ 》

隣村に薬を売り終わって新たな村へと出発する私たち家族と警護しながら付いて来てくれる冒険者の一行。

荷馬車の音と一緒に聞こえる鎧よろいの擦れる音と彼らの会話は

非力な私村人たちにとって『もしも』の時への安心感を与えてくれる。

そんな中、荷馬車の中で空気椅子を試した結果

揺れでこけた私の姿はなんと滑稽な事か。

あくあ、空を飛んでるあの鳥たちは

モンスターがいる世界でどうやって生きてるんだろ？

空気椅子は止めて荷馬車から外の景色を見てるのは

お尻の痛みから目をそらせるかなと思つての試みだったけど

……うん、こうかはいまひとつのようだ。

村についてすぐに『ホイミ』を使つてお尻の痛みを消したりしたけど、

現在進行形で発症している痛みに対して何度も使える程ホイミは安くはない。

だからこうして我慢しているけどお尻が縦だけじゃなくて横にも割れないか心配だ。

『いつか一緒に冒険しようぜ！』

そういえば薬を売るために立ち寄った村で会ったあの少年

ゴブスレに登場する槍使いに似てたな。

もしかして幼少期の槍使い本人か、はたまた槍使いの弟か、槍使いに憧れてる少年だったのかな？

今が原作からどれ位前なのかそれとも先なのか分からないから推測しかできないのが辛い。

あくあ、早く冒険者になれないかな  
そしたら一目でもいいから原作キャラに会ってみたいよ。

『<sup>ウルフ</sup>狼だ！・狼が出たぞー!!』

冒険者の出した声にいち早く母が私の手を引いて私を荷馬車の奥に隠した。

なんだかんだと一瞬混乱したけど、  
すぐに外から犬……狼の声が聞こえて来た事で理解した

これから冒険者たちが戦うのだと。

『狼は基本人間を襲う事はない』

しかし人間は狼にとつて脅威にならないと一度でも学習されると本来の危険度がぐっと跳ね上がる存在になると冒険者たちが話していた事を思い出した。

母の神へと祈るつぶやきに、いつの間にか避難していた父の『大丈夫だ』と繰り返す言葉

外から聞こえる冒険者達が戦う音と声、その中から知らない人間たちの声も加わり

より激しい金属音と冒険者達の声と獣の鳴き声

そして誰かの血の匂い。

外は一体どうなってるの？

なんとか外の様子を見れないか辺りを見回したら  
荷馬車を覆う布地にわずかに小さな穴が開いてるのを見つけた。

父に心の中で謝罪をして、その穴を指で広げて中をのぞき込むと  
狼の死体が3体に盗賊と思わしき人間たちの死体が2体見えた。

恐らく盗賊たちが手懐けた狼を先行させ

冒険者が戦っている中に本体である盗賊たちが乱入してきたのだ  
ろう。

でもゲームやアニメと違って、本物の人間のグロテスクな死体に思  
考とは裏腹に

体が竦み上がってしまう。

彼らは悪党、一步間違えれば家族や冒険者がそうになっていたかもし  
れない姿。

そう分かっているてもなかなか考えがまとまらず落ち着きを取り戻  
せず

視線が四方八方へと向けてしまっていた…… そんな時

冒険者だ

穴の中からわずかに見えた女格闘家と男僧侶の姿に  
体の緊張は治らないが思考は次第に治り始めた。

でも首に近い肩から血を流して片膝をついた女格闘家と  
彼女の傷を呪文で治そうとしている僧侶の姿に  
心の中での行動は既に決まっていた。

『助けないと』

そう、強く思った。

「冒険者視点」

冒険者たちの長い長い戦闘が終わった。

地面に横たわるのは荷馬車を狙った追<sup>ブッシュユワッカー</sup> 剥と盗賊と狼の死体だけ。

冒険者たちはまだ敵が潜んでいるのではないかとしばらくの間は周りを警戒をしていたが

やがて潜伏している敵の気配もないのを確認して一息ついた。

「大丈夫、みたいだな……皆さん、もう大丈夫ですよ」

パーティのリーダーである剣士が荷馬車の護衛者へと伝えると

恐る恐る顔を出したのは依頼者の男

それから彼の妻も姿を見せるも、二人の子供である少女には

荷馬車の周りの惨状を見せないために

まだ荷馬車へと待機させている様子を窺<sup>うかが</sup>えた。

「皆さんが無事で良かった」

「ケガをしてる方は言ってください。」

すぐに薬を用意しますので」

夫婦の言葉に冒険者たちも今になって体中を駆け巡る疲労感と傷の痛みに気づき

夫婦の気遣いに甘える事にした。

「それにしても『女格闘家』がやられた時は焦ったな」

「ほんと、一時はどうなるかと思ったけど『男神官』の小癒ヒールには助かったわ」

夫人の治療に向かう途中で話題になるのは先の戦闘

本来狼の痛恨クリティカルの一撃をくらうハズだった神官は

機転を効かせた格闘家の行動により死を免れたものの、

格闘家は代わりに大きな傷を負って動けずにいたからだ。

しかしそれ以上の威力の小癒ヒールによって動けずにいた女格闘家は

すぐに戦闘に参戦する事が出来、陣形が崩される事もなくこうして勝つ事ができた。

そんな彼女の首周りの服は血で汚れているが、肌には一切の傷跡は残っていない事が確認できる。

「ほら、傷跡一つ残ってないわ

ありがとう、『男神官』」

「え、ええ。

お互いさまですよ」

先行く仲間の背中を見ながら男神官はうつむき考える

『あれは果たして自分だけの力だっただろうか』と……。

《 パララツ パツパツパー 》

……なんで？

冒険者さんたちの戦闘も終わって全員五体満足で良かったと一息ついてたら

突然頭の中で鳴り始めたファンファーレに首をかしげてしまうのは仕方ない、よね？

なんでだ？ 私は今回モンスターを倒してないのになんでレベルアップ音がるの？

！……もしかしてあれか、女格闘家に『ホイミ』を使った事で冒険者パーティの一人としてカウントされて倒したモンスター分経験値をもらったって事？

これってずるくないか？ 経験値を貰える判断基準が分からないな……。

『気をつけろ！ 生き残りがいるぞ！』

頭を悩ませている所で新たな悩み

なんてこった、頭が沸騰しちゃうじゃないか

荷馬車の周りには倒した狼や盗賊の死体があるから両親が考慮して荷馬車の中にいるけど

これには思わず外を見てしまった。

冒険者の後衛が母さん達を守って、

剣士さんと格闘家さんが剣と拳を構えて一触即発状態

思わず私も馬車の中に避難しようかと思ったら

《 ▼ 》

まだレベルアップ後のメッセージが続いていた

「冒険者視点」

「待ってください！」

狼に切りかかろうとした矢先に声を出したのは依頼者の娘である少女だった。

荷馬車から飛び降りて走って来るのを仲間が引き留めようとしたが

それをすると避けて前衛の俺たちの前までやって来たのを慌てて女格闘家が少女を止める。

「だっ、駄目よ！ 危ないから早く荷馬車につ！」

「この子は……この狼は大丈夫です」

少女の目は俺たちに向ける事なく狼にだけ目を向ける

「この狼は……私の『仲間』になりたいと言ってるんです」

……一体、この子は何を言っているんだ？

先程まで死闘を繰り広げた相手が少女の仲間になりたい？

確かに先程まで盗賊達に飼いならされていた狼の一匹だ

人に慣れやすいのかもしれないが、

一歩間違えれば先程の女格闘家より悲惨な目に遭う危険性がある存在に

おいそれと近づけるなんて……

「わんっ！」



…… 随分とデカイ犬だ

そう思う程に凶暴であるハズの狼が少女へおなかを見せて服従のポーズをしている姿は

なんといかすごくシユールで、俺も仲間達も少女の両親ですら飼いならされた犬かと勘違いしてしまう様な光景だった。

そんな状況を気にせず狼の元へと近づいた少女が狼の頭を撫でて  
いる姿は

飼い主と飼い犬の触れ合いにしか見えない。

「この子は今日から私の仲間の『ポチ』、よろしくね！ ポチ」

「わんっ！」

……俺たちの今回の冒険の記録は看破センスライが使われそうだ

それくらい、ありえない状況が俺たちの目の前で繰り広げられていた。

「???視点」

広大なフィールドが広がる四方世界にあるのは人の形をした  
4冒険者つの駒

神と呼ばれるその存在たちは、今日も骰子サイコロ勝負の真っ最中。

彼ら冒険者の今回の依頼は『薬師を乗せた荷馬車の護衛』

護衛日数が長いが一人当たりの日給依頼料が良かったために始めたこの仕事、

しばらくは平和な護衛だったが、何事もなく終わらないのが冒険者の宿命。

コトリと置かれた新たな駒は祈ノンプレイヤらぬ者である狼4体の襲撃です。冒険者は護衛対象を守りながら戦かわなければなりません。当然負ければ死、あるのみ。

さあ、戦闘開始です

『さあ やれ！』 『負けるな』 『骰子に祈れ』

前衛二人の攻撃がうまい具合に敵へと当たり、冒険者は狼の数を一つ、また一つと減らしていきます。これなら誰も死なずに終わると安心したのもつかの間、やって来たのは盗賊を率いた追ブッシュユワツガー剥のお出ましです。狼との戦闘で多少の疲労を持ちながらも冒険者達は諦めずに戦います

しかし、どんなに賢明に戦っていても出た骰子の目は神にはどうする事もできません。

狼の攻撃がクリティカルを出してしまいました。狙われたのは男神官、くらってしまえばどうなるかそこから一気に形勢逆転、パーティは全滅してしまうかもしれません。

『ああ駄目だ』 『なんてこった』 『14頁にはまだ早いぞ』

そんな中でダイス運を發揮したのが格闘家

神官をかばった事によって神官への攻撃を防ぐ事ができたのです。

しかし前衛の一人が瀕死の状態、後衛の神官が回復に専念  
次のターンは敵にとって圧倒的に有利です。

どうか骰子よ骰子よ

神である存在も祈るのです、彼らだって駒がかわいいのですから

どうしたのだろうか

神々は不思議に思いました

大怪我を負っていたはずの格闘家のケガがすっかり治って

戦闘に復帰したのです。

神官の今のレベルで小癒ヒールがここまでの大回復ができただろうか？

ざわつく神々の中の一人がふと目に入ったのは

護衛対象の一人である小さな少女の存在でした。

どこにでもいる様な風貌のこの少女、

よくよく観察してみると魂がこちらと全く違うモノではありませ  
んか。

おまけに神々とは全く違う別の存在からの加護を受けているとか

簡単に言えばTRPG世界に別ゲー設定のキャラが混ざりこんだ  
様なものです。

さらにさらにこちらが用意した祈ソンプレイヤーらぬ者の狼の駒が

少女の仲間になってしまってるではないか。

『なんだコレは』『コレはどこからやってきた』『私は知らないコレ  
はナニ』

謎の力を秘めた存在に神々は困惑します

コレをこのままこの四方世界にいさせてもいいのか否か。

神々は過度な干渉はしないと決めていきます

しかしこの存在は神々とは違う別の何かの干渉がある存z a ……

『良かった良かった』 『無事に終わった』 『あく 楽しかった』

冒険者達は無事に護衛任務を達成しました

冒険者ギルドでにこやかに笑う彼らに神様たちも大満足。

さあ、次はどんな冒険が彼らを待っているのでしょうか

今回も無事に生き残った彼らの次の冒険もとても楽しみだ。

…  
何もなかった

そう、『何時も通りの冒険だった』

## 少女ともふもふと少年　そして別れ

ポチを仲間にしてから数時間後、  
やっぱりどの村に行っても変わらない平和な村に到着した私たち  
家族と冒険者一行。

ちなみに悪人と戦った後は悪人が持ってた武器や金品、  
狼の皮とかは依頼が終わって街に帰ってから売るみたい。

街には冒険者ギルドがあって他にもおいしい料理に綺麗な服に  
娯楽がいっぱいがあるって話は聞いたけど、行けるのは最低でも五  
年後。

早く人間 ni……大人になりたい。

今回も母さんと父さんは村で薬を売って悪人との戦いで軽傷だった冒険者さんは  
両親の荷物の運搬のお手伝い、ケガがひどかった方は荷馬車の荷物の警護をしてる。

じゃあ私は一体何をしているのかって？

私は仲間になった狼の『ポチ』のしつけに挑戦してる所だったりする。

まあしつけと言っても『人をむやみに襲わない』・『人のモノを勝手に食べちゃ駄目』

とか簡単な事だけど、ポチは犬や狼と違うのか『仲間』になったか  
らなのか

私とポチは互いに何を伝えたいのか理解できるみたいでとても世  
話が楽で助かっている。

ちなみに両親が村に着いてからすぐに私にプレゼントしてくれた  
のが

ポチへの獣毛ブラシでうちの親が良い人過ぎて泣ける。

将来冒険者になったら出世払いするから長生きして欲しい。

井戸の水をもらって血がついてるポチを洗った後にブラッシングして綺麗にしたら

次は仲良くなるためのスキンシップとして私が手にしたのはエクスカリバー

……ではなく、ただの木の棒。

早速勢いよく棒を投げればポチがすごい速さで走って行って、口に棒をくわえて帰って来る、それを再び投げるの繰り返し。

『飽きない?』とポチに聞いても『楽しい』と言ってるのが良く分かる。うん、オメー狼じゃねーだろ。

『犬?』

棒を拾って来たポチをわしやわしやなでてたら

この村の少年? が近づいて来た。

色素の薄い髪の少年の視線は私じゃなくてポチの方に向いているのが気になるが、

まあ普通の犬よりも大きいし気になるのは分かる。

犬だと思っている少年に『触ってみる?』とポチをなでながら少年に話しかけたら

最初は手を出すか悩んでいたけど、恐る恐る触ってしまえば

私と少年でポチをわしやわしやするからポチの顔はまさにヘブン状態だ。

うん、やっぱオメー（ry

『人懐っこいな』『でしょ?』『なんてくだらない会話をしばらくしていると

少年を呼ぶ女性の声が遠くから聞こえて来た。

『姉さんが呼んでる……じゃあな』

と言って軽く手を挙げて別れを告げた少年は遠くにいる姉の元へ

と走り去って行った。

こちらも軽く手を挙げて別れのあいさつをした所で、空が赤く染まり始めていたのに気が付いて私も家族の元へと帰る事にした。

まさかポチをヘブン状態にする事に夢中になり過ぎて

こんな時間になろうとは……恐るべしもふもふ。

あの少年も今頃おっきい犬を触ったとか家族に話してるんだろうなあ。

へへへ、犬だと思つて触つていたのが実は狼だったとは思うまい  
来年この村に来た時に真実を教えてみるのも面白いかもしれないね。

来年が楽しみだ。

『ゴブリンが村を滅ぼした』

私たちが荷馬車での薬売りからふるさとへ帰ってから数日後、

あの村がゴブリンの群れによって滅ぼされたと大人たちの会話が聞こえた。

唯一生き残ったのは牛のお産の手伝いで

叔父の牧場へ行ってた小さな少女、一人だけだと。

もし私がある日、少年の正体に気が付いていたら

もし私がある日、少年の姉の顔を一目でも見ていたら

もし私がある日、その生き残った少女に会っていたら

この村が滅ぶと気づいた私は何か行動に出ていただろうか。

あの女神も、この世界の神も私にその答えを教えてはくれなかった。

主人公15歳【イヤーン編】  
春と成長 別れと始まり

厳しい冬も終わりを迎え、新たな自然の命が芽吹き始めたこの季節  
春の息吹で満ち足りた森の中を慣れた足取りで歩く一人と一匹の  
姿があった。

黒色のショートヘアにこげ茶色の瞳をした少女は

幼い顔立ちをしているが、今年で15歳になり成人を迎えた大人で  
ある。

体つきも5年前と比べて少年と勘違いされる事のない女性的な体  
つきになりながらも

日々の生活の中で鍛え上げたその体は同じ年頃の中では引き締  
まった体つきをしていた。

そんな少女の隣にいるのは5年前に少女の『なかま』になった狼。  
艶のある灰色の体毛に立ち上がれば大人一人分の大きさに成長し  
ていた。

犬と勘違いされる様などぼけ顔しかしなかった狼も

この数年で立派な大人の顔ができる程には成長していた。

春になって芽吹き始めた新たな命

その中にはこの時期にしか手に入らない薬草もあって

新芽しんめの部分だけを摘んだり、種類によっては根も薬品に使えるから  
根を傷つけない様に引き抜いたりと今日もなかなか大量だ。

春の薬草の新芽は従来の季節に手に入れたモノよりも効能が高い  
し

粉や液体にしても苦味が少なく、

おまけに売れば結構な値段にもなるので何度でもおいしいという。



前世の『三寒四温』な時期に気温の急激な変化で年齢関係なく体調を崩す人が多かったから  
こうして薬の備蓄を蓄える事ができるのは本当にありがたい。  
去年の冬も無事に『病死』も『凍死』も『餓死者』も出る事ない平和な村で私は暮らしている。

一つの場所に生えてる薬草は全て抜かずにくつつかはそのままにしておく

新たな命を再び芽吹いてもらうためにはそのまま手を付けないのが自然とのマナーだ。

これを何回か繰り返しながら私とポチが森の奥へと入っていると

『グルルル……』

ポチが牙を剥いて唸り声を上げ始めた。

これはポチに教えた『警戒』の合図

人間では気づかない『音』と『匂い』の中いつものとは違う

ナニか悪いモノが森の中にいると気づいたポチがその元凶がいる方向を向いて唸り続ける。

ああ、『また』ヤツらが勝手に住み着き始めたか。

季節関係なくやって来るけど、新芽が出るこの時期には

決まってこの森の中にやって来るけど…… 今日だったか。

めんどろうだからとこれを放置しておく半年もしない内に数が増えて

森だけじゃなく虫や動物、果ては村にまで被害が出る存在だ。

せつかくのピクニック気分が一気に血生臭いものになるのにうんざりするけど

諦めてさっさと駆除しないと、ね。

『GROB……GOB……』

ひいふうみい…… 見える範囲だと七匹か。

警戒しながら進んだ先にいたのは子供と変わらない体躯たいくの  
緑色の醜悪な見た目の魔物モンスター『小鬼ゴブリン』がたむろしていた。

どこかの群れから離れて新たな巣を作りに来たのか  
それとも巣が冒険者によってなくなって命からがら逃げて来たの  
か分からないが

このゴブリンたちは恐らく『渡り』と呼ばれる存在だろう。

多くの経験を積んだゴブリンは放っておくと

ホブゴブリン 大小鬼やら ゴブリンチャンピオン 小鬼英雄やら ゴブリンロード 小鬼の王とか呼ばれる上位種に変異する  
危険性があるから

早めに消さないとならない危険因子だ。

さてどう処理しようかと悩んでいたら

なにやらゴブリンたちが騒ぎだしたから目を凝らして見ると、

ゴブリンたちが捕まえた野ウサギ一匹を巡って ゴブゴブ G B G B 言い争い  
を始めていた。

全員が空腹の中での餌の奪い合いは死んでなかったウサギの脱走  
によって殺し合いに、

おまけに七匹いたうち二匹が同族に殺されて共食いに発展する始  
末に首を横に振るしかなかった。

……うん、残念だけどゴブリンは永久追放対象なんでさっさとこの  
世から退場してもらおう。

ポチと合図を送って戦闘準備を進める

ゴブリンに攻撃する前に腰にはめてる武器、『鞭むち』を取り出し力を  
『ためる』

その間にポチは茂みの中から姿を出してゴブリンの前へと立ちはだかり視線を集めた。

『ウォーーーーーーン!!!』

『GOROBB?!』『GBRO?!』『……!!』

ポチの『おたけび』にゴブリンたちは驚き竦み上った所で、次は私のターン。

ゴブリンに向けるは『皮の鞭』

勢いよく振った鞭はゴブリンに当たった部位を肉ごとえぐり

腹に当たれば臓器が顔を出し、頭に当たれば頭蓋骨に穴を開けて全てのゴブリンは

鞭による一撃で絶命してみんな仲良く地面へと横たわった。

念の為死んだふりした個体がないか、他にも仲間がないかを確認して

完全に戦闘が終わった事を確認したら仲間とのスキンシップが始まる。

体つきは野生の狼とは比べられない程に立派なのに

頭の中は相変わらずワンコだから褒めながらわしゃわしゃ体を撫で続ける。

モンスターに気づかれていない内に『ためる』を使って攻撃力アップ、

もしもの事態を想定してポチに『おたけび』で

ゴブリンのターンが来ない様にしてからの鞭での全体攻撃で戦闘は終了だ。

何度も同じ戦法が利く訳でもないし日によっては武器も剣や弓に変えたりしてるし

こうして誰もケガをしないで済むのは日頃の経験だろう。

ゴブリンを倒してそれでおしまい、とはいかないのが現実だ。

倒したゴブリンの死体をそのまま放置しておけば妙な病原菌を蔓延させる危険性があるから

森の木々に燃え移らない場所へと運んでから燃やそうと思っていたら『妙なモノ』を見つけた。

倒したゴブリンのうち一匹が新品に見える『ふくろ』を持っていた。一見ただの麻袋にしかみえないし人間を殺して盗んだものだと思うのに、

何故かこの『ふくろ』が非常に気になって仕方なかった。

何が入ってるのか分からないまま恐る恐る調べて見ると、

ふくろの中には一枚の手紙だけが入っていた。

《15歳のお誕生日おめでとう

私から、本来アナタが行くはずだった世界の一品をプレゼントいたします。

盗まれたり勝手に中身を盗られない様にちゃんと細工をしてるから安心して使ってね。

これから冒険者になるならとても便利だからだいに扱ってね？

アナタの女神より

P.S.

モンスターから手に入れた事にして出所不明って事にしたくて

ゴブリンに持たせた事は…… 怒らないでくれると女神、とても助かっちゃう♡》

『メラ』

手紙と一緒に燃やすはゴブリンの死体

久しぶりの女神からの接触だが文字だけなのに相変わらず何ともピキピキとくる女神だ。

ちなみに女神からのプレゼントというのは何も入っていないこの『ふくろ』の事、

しかし女神が便利なモノだと言うのも良く分かる。

ドラクエでは定番のこの『ふくろ』、『やくそう』から『うまのふん』まで

アイテムを99個も収納する事もできれば、

剣や槍やりなど普通なら入らない様な鋭利なモノから大きなモノまで入る四次元ポケツ……ふくろだ。

冒険には荷物が多いいし貴重な物が盗まれる危険性もあるから女神がつけてくれた便利な機能は凄くありがたい。

なんとって明日はいよいよ冒険者になるために私は旅立つんだから。

荷作りを終わらせて外に出たら

早朝でありながら村の皆が私の出発を待っていてくれた。

ここ数年冒険者になる為にたくさんお手伝いをしていたらみんなとの友好度が上がっていたらしく

こうして別れの挨拶あいさつにまで顔を出してくれるのは素直にうれしい。

村のみんなの代表として村長が冒険をする際に便利な小道具が入った

『冒険者ツール』銀貨30枚分をもらった。

私がいなくなるのはとても寂しいから辛くなったら帰って来るんだよと

何度も言われてみんなとたくさんハグをした。

父さんからはこの先役に立つからと『テント』銀貨15枚分と『寝袋』銀貨1枚分をもらった。

きっとこれから苦勞するだろうからと、なんとも言えない目をしてるのが気になるけど

必要になる物だとしてもありがたい。

母さんからは自作できるとはいえ、持っていて損はないと

『ポーション』を数本と

銀貨10枚分  
『職人道具』をもらった。

二人ともこんな高価な物をポンポンとプレゼントしてくれて生活費が心配だ。

冒険者として成功したらいっぱい親孝行をするから待ってて欲しい。

そして母さんの背後にずっと隠れているのは今年で4歳になる私の『妹』

まあ……うん、母さんがゴブリンに襲われた後に出来た子供である。

15歳になったらお別れするからと愛情を沢山あげ過ぎたのかかなりのお姉ちゃんっ子になっていて、ここ数日は街に行ったら嫌だと泣かれたし

ついには『おねーちゃんなんか大きらい』とか言われたけど、

今日は『おねーちゃん、大すき…… だからぜったいかえってきてね?』

と言われてハグをして来たから抱っこして頭をなでてあげた。

次に会った時はどれ位大きくなってるのか楽しみだけど、

成長を見届ける事ができないのは自分が決めた道とはいえ少しだけ寂しい。

今日、私は15年間育った村を旅立つ

目に焼き付けるのは朝日で輝く村の景色と皆の顔。

次に帰って来る日が何時か分からないけど、私はこの日の光景を決して忘れるはしない。

何か忘れてはいないか？

そう、旅に出るなら大事な相棒が必要だ。

村を出て向かった先は近くにある森の中、ポチとその『家族』のいる住み家へと私は向かう。

ポチだって大人の狼だ、仲間になってから数年後に雌の狼との間に子供を何匹も作って

今では立派な父親である…… 普段はまあアレだが、レベル的には熊も倒せる位には強くなったもんね、ポチ。

私が森に到着した頃には既に家族との別れを済ませていたみたいで

私が来るのをじっとお座りをして待っていてくれた。

『ここに残ってもいいんだよ？』と何度も伝えたけど、最後まで首を縦に振る事はなかった。

仲間だからこそその提案だったんだけど、立派な忠犬だ……狼だけど。

ちなみに私とポチがいなくなつてからのモンスター問題は

今後は森と村周辺の安全をポチの家族が対応してくれるから安心して冒険に行けるつてもんだ。

ゴブリン すみか  
お前の席、ねーから。

これで心置きなく冒険者ギルドへ迎える

ここから歩いて二日くらいの距離だから早速父さんのテントが役立ちそうだ。

待ってろよ冒険者ギルド、待ってろ都会よ

田舎者が今、都会デビューを果たしてやるからな。

## 番外編：5年後の少女「そういう仕様」

本日は晴天なり

こんな天気の良い日はのんびり散歩をするのも悪くない。

武器も持たず身を守る防具もつけずに年相応の女性らしい服を着てブラブラ歩き、

気になる店があれば入ってみたり、美味しそうな食べ物があれば買って食べてと

普段はモンスター相手に血塗れになってる女とは思えない実に平和なひと時だ。

「嘘じゃないわよ！ 本当よ！」

そんなこんなしながらブラブラ歩いていると

知らず知らずのうちに向かっていたのは冒険者ギルド。

『仕事病だな』と来た道を戻ろうとしてたら、

新人に稽古をつけるスペースに見知った冒険者たちの中から

金切声をあげている上ハイエルフの森人の妖精弓手の声が聞こえた。

まーたドワーフ鉱人の精霊使いシヤーマンと言いつてるのか、

それとも何か賭けでもして無残な負け方でもしたのか。

見た目の美しさと2000歳という年齢でありながらパーティの中で一番子供っぽい彼女。

そんな彼女が騒いでいるという事は、また何かやらかしたのだから。

「あつ！ 『まもの使い』！」

彼女が一体何をやらかしたのかと野次馬するつもりで顔を見せたら

『噂をすれば影』と言わんばかりに私に向ける瞳はランランと輝かせていた。



『アツ（察し）』これは良からぬ事に関わりそうだ。

「ど、どうしたの？」

「ねえねえ、アンタたまに武器に『ブーメラン』使うわよね？　ね？」

「え？　まあ……うん。　使うけど？」

ずんずん顔を近づけて来て質問してきた内容はなんてことない武器について。

なにか変な質問でもされるのかと思っていたから肩の荷が下りて普通に答えたら

『ホラーッ！』と野次馬をしていた冒険者たちに『私が正しかった』と言いたげに声を上げ、

『嘘だろう？』と言いたげな冒険者たちが騒ぐのを見て

ポツンと一人放置されるわ話題に追いつけないわで少し寂しい。

「だからさあ！　これ！　使つてよ！」

フンスフンスと鼻息荒げて妖精弓手が私に手渡してきたのはどこにでもある木製のブーメラン一つ、

そして指さす場所にあるのは私達から少し離れた先にある2ℓペットボトルサイズの木材が5つ。

『この木材は敵だと思ってヤッチャって！』と言われたけど、投げて一体何か分かるというのか。

「……………ふんっ！」

体をひねって勢いよく投げたブーメランは強い回転を維持したまま木材に向かい、

全ての木材に命中させ、威力を下げながらも私の元に戻って来たのをつかんだ所で

ブーメランは一周回った事になった。

うん、動いていない的だから外す事がないから楽でいいわ。  
これがモンスターだと後半は余り当たらないから全体攻撃（）って  
印象になってたけど、

全部命中したらやっぱり気持ちいいや。

そういえば命中した木材が粉碎したけど大丈夫だろうか。

「さっすが『まもの使い！』 どーよ！凄いでしょ！」

まるで妖精弓手がやったと言わんばかりにふんぞり返り、

周りの冒険者は呆然としてたり驚いてたり不思議がっていたりと  
十人十色だ。

「ど、どうして攻撃が当たったのに手元に戻ってくるんですか？

俺達何度もやったけど当てたら落ちて帰ってこないのに」

「あ」

ざわざわしていた冒険者たちの中から声を上げた白磁等級の新人  
冒険者の言葉に体が凍り付いた。

そういえばそうだ、この世界では……いや、

普通ブーメランが敵に当たっても帰って来るなんてありえない事  
だ。

子供時代は疑問に思った事もあったけど、ドラクエ設定の体になっ  
ている私だから

こういうもんだと悟って以来気兼ねなく使っていたけど、普通なら  
ありえない事だ。

遠距離から全体攻撃ができる武器だ、

ゲームでも店先に並んでいたら進んで購入していた身としては

誰だって私みたいな使い方ができるなら使いたいに決まっている。

「そーよそーよ！ どうやったたらそんな便利な使い方出来るのよ！」

「教えなさいよお！」

「俺達も是非！」

「お願いします 『まもの使いさん』」

『おれも』『私も』と話しかけてくる冒険者たち

中には同じ銀等級までいる始末だ。

そ、そんな事言っただって 言っただって……。

「あつ！ 逃げたつ！」

「ちよつと！ 待ちなさいよ 『まもの使い』——！」

本日は晴天なり

でも、せつかくの休日は冒険者たちとの鬼ごっこにより中止になった。

しようがないんだ、教えたくても教えられない

そんな転生者だけの悩みのタネに振り回された一日であった。

【 終わり 】

## 番外編：5年後の少女「そういう仕様2」

【不思議だよ！ まもの使い】

本来ドラクエ作品に転生するハズだった主人公はドラクエ要素を持ったまま

ゴブスレ世界にやって来たせいで

ゴブスレ世界の人達から見たら普通とはかけ離れているよ！

【不思議要素：武器劣化】

まもの使い主人公が使うブーメランは他の人と違い手元に戻るのも謎の一つだけど、

一番の不思議は彼女の使う武器と彼女の腕だ。

「うーん……この武器、そろそろ新しいのに変えようかな」

暇潰しにまもの使いに会いに来た妖精弓手が見たのは

彼女が今まで使ってきたであろう色んな種類の武器が床に並べた部屋で

首をかしげている姿だった。

「そうなの？ どれもまだまだ使えそうだけど」

大剣からブーメランまで幅広く揃えられた武器が床に並ぶ景色は  
圧巻の一言だ。

そしてこの武器を手に入れるまでに今までどれだけの金貨を使っ  
たのかと考えもしたが

それも直ぐに振り払い、彼女が売ろうか悩んでいる武器を見つめ

る。

買って間もない武器だろうか？

いくら沢山武器を持っているからと言ってそうホイホイ売るとい  
うのは

少々勿体無いのではないだろうか？。

「うくん、でもかれこれ10年は使い続けてるし

使ってる時にナニかあってからじゃ遅いからなあ」

「……えっ？」

どう見ても刃こぼれ一つ錆び一つない武器を10年使い続けてい  
た？

彼女は私達がゴブリンスレイヤーに会う前から多くのモンスター  
を相手にしてたと聞く。

いくら大事に扱っていても劣化し使えなくなるのが武器だ、

これはどんな冒険者たちだって経験する事であり当たり前的事だ。

実際アイツ<sup>ゴブスレ</sup>だって武器の切れ味が落ちたら敵の武器を拾って使っ  
てるのに

彼女は武器を駄目にした事がないと？。

「えっと、ちなみに武器の修理に出した事は？」

「えっ？ うくん……剣とかのグリップ部分を直して貰った事はある  
けど？」

つまり、彼女は今の今まで剣の刃先を駄目にした事がないって事？

そんな剣の達人でもないのに……いや、

私が気づいていないだけで実際は凄腕の大剣豪だったのか？。

いやいや、そもそも彼女は剣だけじゃなくて鞭や杖とか多種多様の  
武器を使ってるから

大剣豪とかなハズは……。

「どしたの？ 妖精弓手？」

「……うん、アイツも変わってると思ってたけど、アンタも相当だわ」  
「??？」

いくら2000年生きていても分からない事実から目を逸らした方が利口だと悟った妖精弓手。

そんな彼女が同じ銀等級の冒険者たちからまもの使いが

ゴブリンスレイヤー以上に『変わり者』扱いされている事を知るのはもうちよつと先のお話。

「おわり」

## 街とテント ようやく再会

満天の星の下、暖かな春を迎えた季節だが日が沈み夜になれば肌を隠し

温もりが必要となる遅い時間に焚き火を前に座る少女と隣で横になる狼のポチの姿があった。

そんな一人と一匹の首元には冒険者の証である白磁等級のタグが焚き火の光を浴びて輝いていた。

今日は本当に疲れた。

タグを手に入れる為に街の門番と衛兵とギルドを相手に狼であるポチがいかに優秀で

どれ程安全な狼かを数時間かけて説明して、最終的に看破を使われて本当に安全かどうかを調べられたりたけど

『常に私と一緒にいる事』

『街にいる間は食事以外ではポチに口輪をつけている事』

『ポチも冒険者登録をしておく事』

この三つを守っていれば街への出入りを許可して貰えた。

これで一安心かと思っただけど問題はまだまだ山積みだ。

私とポチの冒険者登録が終わったと思っただら日が沈みかけていて、せつかくの初依頼&冒険は泣く泣く諦めて旅の疲れを取るために街の宿に泊まろうと思ったら

宿屋全店舗にお断りされてしまった。

おまけに獣人族でもOKな宿ですらまんま獣を宿泊させるのが嫌なのか遠まわしにお断りされて、

じゃあ馬小屋で休もうと思っただら馬が怖がるからと馬主さんにお断りされてしまった。

そして現在、私が街外れでテントを張って焚き火をしている理由  
だったりする。

……うん、父さんが何とも言えない顔をしてテントを渡して来たの  
は  
街でこうなる事を理解してたからだっただね、ありがとうパパ  
ン。

「クウン」

隣にいるポチが申し訳なさそうな顔をしてうつむく頭をわしやわ  
しや撫でて慰める。

ポチとは五年も一緒にいる大事な仲間だ、今更邪魔だから村に帰れ  
なんて言う訳がないし

言うようなら『鬼！悪魔！ちはゞゲブンゲフン』だ。

まあ今日一日を潰したけど結果的に私もポチも冒険者になる事は  
できたんだ

早速明日は武器防具を買ってから白磁等級用の依頼を受けるとし  
よう。

そしてお金を稼いで冬になる前に借家を買うなり出来るくらいは  
稼がないと

ポチとフランダーズエンドを迎える事になるから頑張つて稼がな  
いと。

さあ、魔物・虫除けのお香を焚いて眠りにつこう

ゴブリンには余り効果がないからポチと交代で眠るけどね。

朝から向かった先は武器と防具を取り扱う武具店に私とポチは来



店……する前に

『ポチと常に一緒にいる事』という契約によってポチを店の外で待たせる事ができないから

店主に迷惑をかけないために一応ポチの足裏は拭った。

店の中に入るとまだ朝早いからか店内にお客の姿はなく貸し切り状態の中を

沢山並ぶ武器や防具を見て歩くだけでなんだかワクワクしてくる。

「新人か」

誰もいないと思っていたけど当然店主はいる訳で、

店の奥から姿を見せたのは片目を閉じた鉋人の様な体格の男性が話しかけて来た。

確か彼もゴブスレで登場してたっけ、15年も前の事だから忘れてたけど

偶然とはいえ彼のお店に来たのはラッキーだ。

職業は初めてのクエストだから身の安全のために一番レベルが高い『まもの使い』をチョイス。

そして防具は店主と相談して『鎖帷子』と『革鎧』と『小盾』と頭部を守る『皮兜』を購入した。

ちなみにこれだけで銀貨200枚使っていて、一番高価だったのは鎖帷子銀貨130枚だったりする。

店内に飾っていたのは男性用だったから店主が女性用の防具を店の奥から持ってきてくれたから

早速店の奥にある試着室で着替える事に……『武器や防具は持っているだけじゃ意味がない、

ちゃんと装備しないと』ね。

『……』

『……』

んっ？ 店主が誰かと話す声が聞こえてくるけどお客さんかな？  
装備がどうのこうの言ってるし、もしかしたら私と同じ新人冒険者  
かも知れない。

今までポチとしかパーティを組んでなかったから誰かと一緒に冒  
険するのも面白そうだけど

うっかり狼だからってポチが攻撃される危険性もあるからちゃん  
とした人を見つけないと。

うん、一部分だけ窮屈だったけどベルトを調整したら違和感なく装  
備する事ができた。

防具を全て装備して更衣室から出ると、

店主と一緒にいるのは防具を着けた冒険者の青年と

店に並べてあった革鎧を着る銀髪の青年の姿があった。

俺の壮大な冒険譚が始める前準備として武器屋で剣を買いに来た  
ら

不愛想なヤツが武器を買ってすぐにつけ始めたから俺と同じ初心  
者である白磁等級の同業者として

一緒にパーティを組まないか誘ったら既に依頼を受けたのかゴブ  
リンにしか眼中にない男だった。

「ねえ」

仲間勧誘に振られたし別の奴を探すとするか、と思ってたなら

店の奥から姿を現したのは胸元に白磁等級のプレートを下げた女  
冒険者だった。

彼女の装備は傷一つない、恐らくここで防具を買って店の奥で着替えていたんだろう。

それだけならなんて事ない事だが、彼女の隣には村でも見た事のない程大きな狼が大人しくついて来ている姿に

何者なのかと不思議でしかない。

「えっと……五年前に一度、会った事ないかな？」

そんな彼女が指定したのはゴブリン退治を予定している男に対してだった。

五年前に会ったと彼女は言ってるが、十歳頃の話題を出されてもそうそう覚えていないだろうと男の方を見たら、何故かアイツの視線は彼女ではなく

彼女の隣にいる狼に視線を向けていたと思ったら

「わふっ」

「……そうだ」

狼が床にお腹を出して寝っ転がった姿を見たアイツはほんとに今思い出したのか

ようやく彼女の方に顔を向けて返事をしたのを見て、

あの男の記憶の順位が狼の彼女の順だと部外者から見ても明らかだったか

彼女が嬉しそうにしていたのを見て口には出さなかったのは英断だと思ふ。

「もしかしてゴブリン退治？」

もし良かったら着いて行っついていいかな？」

「ああ」

「ありがとう。えっと、早速なんだけど

その剣は洞窟だと長いから変えた方がいいかも？」

「……そうか」

気が付いたら同じ新人があっさりパーティを組んだ姿を見た俺は冒険者のパーティ結成の瞬間が自分が思っていたのと違って、だったら理想のパーティを作ればいいと考え直して理想の冒険者と違った二人を放つて

俺は俺の求める冒険の仲間を集めるために足早に冒険者ギルドへと向かった。